

研究活動報告 (27)

滋賀県甲賀市水口町植の山神祭 調査報告

朴 炫国*

調査概要

滋賀県甲賀市水口町植の山神祭 踏査

調査日-2010年1月2 (土), 2010年1月30日 (土)

調査者-朴炫国

序言

毎年1月3日朝滋賀県水口町植の28世帯の村人は三つに分かれ山神祭を行なう。山神祭を行われる所は三つの所がそれぞれ違うが準備する人、祭祀の目的、祭祀を行われる所の形態、お供え物などはほとんど似ている。1月3日山神祭を行われ、1月11日田へ行って農作業を始める儀式を挙行する。

目的

山神祭の目的は一年の間、村の安寧の祈願と農作物の豊年、家の安全と幸運等を祈願する意味で行われる。特に山神は女性神で農作物を管掌する女神さまである。山神は5、6月田植をする頃、山から下って農作物の成長と豊凶と収穫を支配し収穫が終わればまた山へ上がるという観念を持っている。

祭官

祭官は村人が当番制を引き受けて準備する。祭官は山神祭を執り行なう前に祭場周辺の整理、燃やせる薪の準備、お供え物の準備などすべてのものを引き受けて準備する。使用する費用も皆慣例的に祭官一人で担当する。村人は年の手順で循環するから何年度

* 龍谷大学国際文化学部准教授・里山学研究センター研究スタッフ

に自分が祭官をするかを皆、分かっている。祭官は神社の宮司の役目を担当する。たぶん神社が存在する前から村人は山神祭を執り行なった。したがって山神祭の祭官は神社の宮司の原始形態だと見られる。

お供え物

お供え物は簡素するように準備する。餅、海老、いわし、栗、蜜柑、崑布、米、お酒、乾しがきなどである。そして祭場を表示するしめ縄が打たれる。しめ縄は稲のわらを組んで作るのにしめ縄には紙銭を挟んで、かつおの尾びれを竹にさしてしめ縄にさしておく。ツトは男性を象徴することで稲のわらの下部分を縛ってその中に丸い砂利を入れて反対方向で折って縛ったものである。参加する人々は自分の男家族の中の男の数のツトを作って祭場週辺におくとか祭場前にむらさだって置く。

左義長

山の神と書かれている立石の前にお供え物をこしらえて儀礼をした後、祭場前の中央で左義長をする。左義長の火が高くよく上がると新たな一年、豊年になって良いことがたくさん生ずるという。火を起こして火の週辺から祭官が祝辞をして一年間の所願成就を祈願する。そして火の回りでお酒を分けて飲んで飲福をする。この時お供え物で使ったお餅を火に焼いて食べる。

構成

この植の村の山神祭に参加する全体26世帯（村人は幹と言い）は三区で分けて三つの所で山神に祭祀を執り行なう。どうしてこんなに三つの幹で分けて三つの所で山神に祭祀を執り行なうのか具体的に知られていない。ただ、さまざまな情況で考えて見れば宇田と植が共同に所有している宇田・植の共同山のドリがオカ（鳥ヶ嶽）山の所有によったと見える。宇田と植の村人が所有しているドリがオカ（鳥ヶ嶽）山は四種類の形態で分けて見られる。

①宇田・植の村人の個人が山の一定の部分を分けて所有している。

②植の村の団体が山の一定の部分を持っている。

③宇田の村の団体が山の一定の部分を持っている。

④植の村と宇田の村の共同で山の一定の部分を持っている。

植の村人々は区域を三つで分けて山神に祭祀を行う。各区別の分類と世帯を整理すれば次のようである。

1) 1区は14世帯が村の中央にある吉山神社の隣で朝8時半頃、山神祭を行う。祭祀を行う所は東南方へ立てられた山の神と書かれた立石の前にお供え物をこしらえて、その前に円形で地をほって薪の火を立てながら始める。植の村人14世帯の男性だけ参加できる。参加者は皆20余人なのに比較的簡潔するように山神祭を行なって飲福も簡素した。お供え物で使われた海老は赤くて小さかった。祭官は白い服を準備して、着替えて祭儀を主管した。〈西村矢一郎、男、73歳、情報提供〉

植の村の中でこちらに参加する世帯を列挙すれば次のようである。

191 沢田 潔, 191 沢田 光之, 186 沢田 富二男, 216 沢田 富雄, 210 沢田 勉, 202 沢田 真作, 194 上村 隆, 195 上村 俊之, 189 上村 喜秋, 225 上村 孝司, 214 上村 正, 190 木村 文一, 240 西村 弥一郎, 196 西川 良平 (この家は元々こちらではなかったが 西川が家と地を買って引っ越して来ながらこちらに属するようになった。) (数字は植の家の番地です)

氏姓別構成は沢田が6幹, 上村が5幹, 西川, 西村と木村がそれぞれ一幹である。

2) 2区は8世帯が村の西の方にある国中神社の裏手で朝9時くらい山神祭を行なう。祭祀を行う所は西の方へ山神と書かれた立石を中心にお供え物を置いてその前に円型の左義長をする所がある。たとえ8世帯がする山神祭だが飲福が豊足した。祭官は目上(年長者)が担当したが比較的山神祭に対して姿勢と分かっていた。左義長をする時には先に今年の良い方向は南東と言いながら参加者皆が西南西の方へ向うようにして一年の幸運を祈った。〈城、男、72歳、情報提供〉

植の世帯の中ここで山神祭を行う世帯を列举すれば次のようだ。

207 西川 嘉, 205 西川 美喜雄, 198 西川 勇, 200-2 西川 義雄, 204-1 西川 満, 209 城 菊郎, 211 城 平八郎, 227 上里 守, 氏姓別の構成は 西川が 5 の幹で一番多くて 城が二幹と上里がそれぞれ一幹である。

3) 3区5世帯は東南の方にある宇田の村と合同で村の南西の方にあるドリガオカ(鳥ヶ嶽)山の入口で7時頃山神祭を行う。3区は宇田の村人と山神祭の前日から山神祭に使用のお供え物を準備する。特に山神祭のお供え物は竹を薄く削って横、縦30センチメートル程度で皿を作って、その上にお供え物を置く。海老をおく竹の皿と残りのお供えをおく竹の皿は少し違う、海老のための皿と他のお供えの皿は竹の皮と中が反対で編まれる。ドリガオカ山の入口の右側森に城隍堂がある。この城隍堂の横で山神祭を行う。こちらは参加者も一番多くてお供え物や飲福する食べ物なども一番多い。山神祭を行う城隍堂の向こう側山の中でまた山祭を御祭る。こちらには山神と書いている立石がある。立石の前に竹の皿三枚をおいてその上にお供え物を置いて行う。簡単な山祭を行なう。山神祭を行なってツトは皆城隍堂の石の上に乗せる。ツトは稲のわらの中に砂利を入れて縛りつけた。こちらしめ縄には紙銭、かつおのしっぽ、海老の足、ユズリ葉などが挟まれている。

こちらに属する世帯を列举すれば次のようである。

212 村上 健, 224 村上 光男, 204 沢山 僑彦, 188 木田 三郎(途中に移住したという), 187 西村 良隆

氏姓別構成は村上が二幹で一番多くて西村、沢山と木田がそれぞれ一幹である。

植城

植の村には植城の痕跡が残っている。植城は発掘調査結果、中世(室町時代)の城館跡である。城館は防禦のために土塁や溝を掘って地域の有力者の家や建物を守ろうと図った。直四角形で225メートル350メートルの大きさである。村人は山神祭を執り行なう所が三つで分けられている。植城を中心に住居地域にしたがって参加地域がどの様に変わってきたのかも関心の事である。